



*SPAIN Ya Ya*の

面白エッセイ

シリーズ（第二弾）

幸多 魅瑠

スペインアンダルシア地方都市での
日常生活や人間模様を著者独自の
観点から綴ったユニークエッセイ

1.スペイン人って

私は100%完璧にスペイン語がわかるわけではいけれど、スペインのTV番組を見るのが好きだ。比較的よく見るのがワイドショーとトーク番組と芸能ニュースで、TVを通してスペイン人のキャラクターが見えてきて面白い。TVでも街中でも女性達の格好を見ると、思いっきり刺激的な服を着ているし、メイクもバッチリ・クッキリで自然に近い薄化粧はあまり人気がないようなのは、とてもうれしい。どちらかというとも私も若い頃からメイクはかかしたことがなく、ノーメイクでいると裸でいるみたいで何となく気分がよくない。こちらのTVで見るタレントやコメンテーターのおばさま達など、バッチリメイクに派手な服装で、目一杯自分を美しく見せようと気を使っているのが画面を通して伝わってくる。男性もおしゃれな人が多いし、気候の違いもあるだろうけれどドイツのようにどこを見ても黒ということもない。

トーク番組を見て一番面白いのは、違う意見をもっている人同士が話すとき、どちらも全く相手の言っていることなど聞かず、双方が同時に自分の意見をしゃべりまくることだ。本当に相手の話など聞かない。だから、いつまでたっても2人の見解は平行線で、相手の言うことに納得し自分の意見を変えろという場面には、まずお目にかかったことがない。それと会話中に頻繁に“うそ”という言葉が使われて、相手を嘘つき呼ばわりすることも日常茶飯だ。でも双方の言っていることが食い違うということは、どちらか一方が嘘をついていることになるけれど、どちらが嘘をついているかは、いつも謎だ。芸能人に興味があるのはどこの国でも当たり前だけれど、TVは一般の人々の多くの娯楽の対象になっていて、朝から深夜までワイドショー的な番組がすごく多くて、何人もの見物人を揃えていて若年から年配者まで各局スタジオに男女とりまぜて、一般人が参加しているのを見るたびにいつも私は平和だなと思う。

2.スペイン人って 続き

例年以上に寒かった冬が終わり、やっとコスタ・デル・ソルらしい気候になり現地の人々がビーチに出始める頃だ。これから夏に向かい午前中は地元の主婦達とかが多くて、豊満すぎる身体をおしげもなく太陽にさらしている。私はビーチというどうしても日本の若者達で占領され、軟派目的というイメージが先行してしまうので、最初にこちらのビーチ風景を見た時は、正直驚いた。平日は若者より年配者の方が断然多い。ビーチはトップレスの女性（年令もスタイル良し悪しも関係なく）が結構多いのも、日本の風景と大きく違う点だ。

若者達もビーチは軟派するところではなく、日光浴やラケットボールなどを楽しんでいる。どこで男女が知り合うのかというと、やっぱりナイトライフでBARやDISCOが一般的だ。日本では私の年齢で、いわゆる大人がダンスを楽しめる処が中々なくて諦めていたけれど、こちらでは行く所に困ることはない。ディスコも年配者が一杯で、若人が顔負けするほど、じゃんじゃん踊る。

本当にこちらの人々は、人生を楽しむことに貪欲だ。一年の内何度もあるフェリアしかり、飲んで食べてしゃべって、踊って、悩みなんて吹き飛ばしてしまう。そんなスペイン人の楽しみ方は私を魅了していることの一つである。

3.スペインのニューヨーク

ここコスタ・デル・ソルはヨーロッパでも人気のリゾートで、近隣諸国からの入植者が多いコスモポリタンな地域である。様々な人種が集まっているのはニューヨークに似ている。一番多いのが英国人で、他にヨーロッパ各国、アラブ諸国、ここ2~3年急増したのが、南米人と中国人、それにアフリカ不法移民が加わる。

私は4年前サルサを習い始めてからスペイン人の友人ができて、スペイン社会にも入れるようになったけれど、それ以前は中々スペイン社会に入り込むことはできなかった。以前から不思議に思っていたこと、こちらの外人社会とスペイン人社会は交わっていない。何十年住んでいても全然スペイン語を話さない外国人（特にイギリス人）は結構いるし、そういう外国人をスペイン人たちは、快く思っていないし、例えスペイン語が話せてもやはりスペイン社会に入るのが難しい現状だ。

私のスペイン人の友人たちは数多くあるイングリッシュやアイリッシュBARには絶対行かないし、インターナショナルフェリアでさえ他のヨーロッパの一時店舗には入ろうとしない。私が訪れた他の国では、例えばハンガリー、ドイツ、北欧などでは外国人はもっとその地域に溶け込んでいたし、又現地の人々も彼らを受入れていたように思う。恐らくここコスタ・デル・ソル自体が、特殊な地域なのだろう。近隣の外国人たちが退職後のセカンドホームや、バカンス用に多額の資金を投入し、この地域は発展してきたのである。

それにしても私が住んでいるこの8年間を見ても、スペイン人と外国人の距離は縮まらないのは、ある意味で不思議だしとても残念なことだ。

3.スペインのニューヨーク

ここコスタ・デル・ソルはヨーロッパでも人気のリゾートで、近隣諸国からの入植者が多いコスモポリタンな地域である。様々な人種が集まっているのはニューヨークに似ている。一番多いのが英国人で、他にヨーロッパ各国、アラブ諸国、ここ2~3年急増したのが、南米人と中国人、それにアフリカ不法移民が加わる。

私は4年前サルサを習い始めてからスペイン人の友人ができて、スペイン社会に入れるようになったけれど、それ以前は中々スペイン社会に入り込むことはできなかった。以前から不思議に思っていたこと、こちらの外人社会とスペイン人社会は交わっていないのだ。何十年住んでいても、全然スペイン語を話さない外国人（特にイギリス人）は結構いるし、そういう外国人をスペイン人たちは、快く思っていないし例えスペイン語が話せてもやはりスペイン社会に入るのが難しい現状だ。

私のスペイン人の友人たちは、数多くあるイングリッシュやアイリッシュBARには絶対行かないし、インターナショナルフェリアでさえ他のヨーロッパのカセタには入ろうとしない。私が訪れた他の国では、例えばハンガリー、ドイツ、北欧などでは外国人はもっとその地域に溶け込んでいたし、又現地の人々も彼らを受入れていたように思う。恐らくここコスタ・デル・ソル自体が、特殊な地域なのだろう。近隣の外国人たちが退職後のセカンドホームや、バカンス用に多額の資金を投入し、この地域は発展してきたのである。

それにしても私が住んでいるこの8年間を見ても、スペイン人と外国人の距離は縮まらないのは、ある意味で不思議だしとても残念なことだ。

4. スペインの刑務所

以前TVで「刑務所内のコーラス」という番組があって、毎週興味を持って見ていた。内容はスペインの刑務所の囚人たちの娯楽活動の一つにコーラスクラスがあり、音楽教師が彼らにコーラスを教えて3ヶ月くらいかけて練習して、最後は特別に用意された会場で、成果を披露する迄の過程を紹介するというもの。

まず私が驚いたのは、スペイン刑務所の条件の良さだ。誰もが私服でシマシマの囚人服なんて着ていない。外の世界と全く変わらず思い思いの服を着ている。タバコも許可されていて、小さなマーケットもあって、日用品はそこで調達できる。部屋もちょっとした小ぶりのワンルームマンション並だ。唯一外界との違いは、外から部屋に鍵をかけられてしまうこと。コーラスのクラスに参加していた囚人達はといえば、殺人などの重罪犯を除いて多くがドラッグ関連、他は窃盗などで刑期も2年から10年以上とまちまちだ。誰もが皆穏やかな顔をしていて、とても犯罪者には見えない。番組では囚人たちのプロフィールも紹介され、友情ありコーラス教師との暖かい交流ありで、1クルールのクラスが終了して教師との別れでは涙ありで中々感動ものだ。

自由が拘束されているとはいえ、刑期中は食べることに困ることもなければ仕事や生活の心配もない。楽しむための娯楽のクラスは、コーラスはじめ楽器演奏、工作や絵画のほかにスポーツジムまである。あまりの待遇の良さに驚いた旨をこちらのスペイン人の友人に告げると「囚人でも同じ人間、罪の償いとして自由を拘束するだけで充分だし、人間としての尊厳までは奪べきではないし、彼らにも楽しむ権利はある。」という返事を聞いて「北風と太陽」の逸話を思い出した。罪の償いに、冷たい北風ばかりあてても逆効果かもしれない。

実際の再犯率は定かではないけれど、番組内の囚人の誰もが、もう二度と同じ過ちは絶対繰り返さないと断言していた。特にフランコ独裁政権が崩壊したあとのスペインは、自由に向けて急速に変貌した。個人の尊厳に対しての見解はフランコ時代の反動も大いにあるだろうけれど、犯罪者たちにとってもやさしいスペインだな。

5. スペインの声優うまい！

自宅のTVはサテライトではないので、見るのはもっぱらスパニッシュプログラムである。特に映画は良く見る方だけれど、こちらの映画はほとんどがスペイン語の吹替えになっている。たまにフランス映画や、イギリス映画を字幕付き原語で放映することもあるけれど、それ以外は他国の映画はすべて吹替えだ。

何より私が感心して見ているのは、オリジナルの俳優がしゃべっている口の動きと、声優のアフレコにずれがないことだ。たぶん翻訳後の台本のうまさと、声優のレベルの高さによるものだと思うけれど。こちらのTVで日本映画「七人の侍」を見たときも、声優の上手さに感心した。声自体も三船敏郎や志村喬の実声と似ていて、まるで日本人俳優がスペイン語をしゃべっていると錯覚するほどだ。漫画の「ドラエモン」「クレヨンしんちゃん」もこちらでは人気があり、画面を見ずに声だけ聞いていると、やはり日本漫画のキャラクター達がスペイン語で話してるみたい、といっても決して大げさではない。

日本の声優のレベルも、すごく高いと思っていたけれど、スペインの声優もすごい。売れている声優は何人も俳優の声を、掛け持ちで吹替えしたりしているのも、日本と同じかもしれない。ともあれスペイン声優陣に拍手！

6. Skypeハイジャック事件

現在同棲中の彼は、PC使用のホームビジネスをしている。元々名うてのセールスマンで、投資物件を扱う有能なブローカーである。良いと思っているものでさえ、セールスが苦手な私とは彼は正反対のタイプだ。

ある日の午後、顧客とSkypeを使って通話中にいきなり通話が途切れ、突然ログインできない状態になった。それから30分も立たないうちに彼のメールにPayPalを通してSkype商品購入決済の通知が、5~6件立て続けに送付された。彼はすぐにPayPalカスタマーサービスに電話をして事態を説明したけれど、中々埒があかない。次に彼は、PayPalと連動させている自分の銀行に連絡しその後の決済をストップするよう要請した。その時点での被害額は1件が20~30€だったのでトータルで約200€だ。彼はSkypeのワールドスクリプションを利用して、顧客への連絡は全てSkype使用だし、彼のアカウントに登録してある顧客リストも180件あり、その時点でバックアップを取っていなかったため、ハイジャックされてからの数日間は、彼のビジネスも完全ストップ状態だ。Skype側に連絡を取ろうにも、HPのどこを見てもサポートはメールのみで電話番号は載ってない。Skypeフォーラムで見ると同様の被害にあった報告も何件か出ているけれど、その誰も解決まで至ってなくて、半分あきらめながらSkypeサポートからのメールを待っているようなものばかりだった。

彼はといえば、アカウントをハイジャックされてログインできなくなったときはパニックっていたけれど、被害の状況を把握しサポートに直接電話できないとわかった時点で、怒り心頭だった。その後、アカウントに登録してある彼の親しいビジネス仲間（スイス在住）もハイジャックされたりと悪いニュースの追い討ちだ。でも前述の様に個人で名うてのブローカーで飛ばしてきた彼は、絶対泣き寝入りなどはしない。そこからが彼の快進撃の始まりである。ということで、事件の顛末は長くなるので次回で。

7. Skypeハイジャック事件2

私の彼のSkypeがハイジャックされて、被害は次々に口座から引落とされた200€と、ログインできなくなったアカウントに登録してあった180件の連絡先を失っただけには留まらなかった。その後彼のパソコンバックオフィスにも、どうやらハッカーが入り込んだらしいことが判明し、すぐに知合いのIT専門家を呼び、詳しい調査と排除と2重のウイルスチェック機能まで追加してもらった。それと同時にメール、ホームページ、ブログ、メンバー登録しているSNSやその他のサイト等のIDやログインネームとパスワードのすべて、特にパスワードは全部違う絶対に予測できないようなものに変更して万全の予防策を講じた。

Skypeのサポート電話番号はどうしても見つからなかったもので、彼はまずBBCの記者に電話して事件の被害を話し、泣き寝入りするつもりは全くないこと、すぐ被害についてのHPを作成し、アメリカで同様の被害にあった弁護士と共に全世界に発信する旨を告げたら、何とその記者はSkypeカスタマーサポートの連絡先電話番号を知っているという。そして事件から2週間後、とうとうサポートのチーフなる女性とコンタクトが取れたのである。

Skype側も独自の調査班を出動させて詳しく調べるとのこと、何度かの長時間に渡るやり取りの後、彼の不正に決済された金額も、失ったアカウントの連絡リストも全て戻ったのである。Skype調査によるとハイジャックされた彼のアカウントから、中近東やアフリカへ頻繁に電話が使用されていたようだ。

それにしても未だに私が不思議に思うのは、SkypeHPにも検索エンジンにも載っていない電話番号を一体誰がどうやって調べられるのだろうか？そして一体誰の何のためのサポートというのだろうか？今回は彼の強い反骨精神もあって解決までに至ったけれど、泣き寝入りしてしまう人も多いのではないだろうか。

というわけで、文句をいうべきときは言う、正当な権利はきちんと主張しあきらめず闘うべきだということ、事件を通し学ばせてもらったけれど、何より私が疑問に思ったことは、彼がBBC記者に事件のことをネットで一般公開すると言ったときに何故その記者はそれを記事にせず、スカイプ側に仲介したのかという点である。彼の推測によると現在SkypeもPayPalもeBayがオーナーで本社は全て3社とも、登録住所がルクセンブルグとなっている。おそらく、BBCとeBay間のバックサイドで取り決めのようなものがあり、BBCはSkype問題を大きくしないよう擁護したのではないかというのだ。その説明で何となく私も納得したけれど、大きなビジネスや政治の裏世界では、私如き一般人が知るべくもない様ざまな取引があるんだろうなと感心した次第である。

8. ナイジェリアの手紙

ナイジェリアからの手紙・ナイジェリア詐欺とは、アフリカ主にナイジェリアを舞台に多発している国際的詐欺の一種で先進国などに住む人から手紙やFAX、電子メールを利用して金を騙し取ろうとする詐欺である。もう10年以上前から行われている詐欺で毎日2万通のメールが世界中に送付され、最近も米国、ヨーロッパで150名が被害にあい今年3月マドリッドの組織が摘発され23名が逮捕、という記事を読んだ。

私は8年前まだこちらに住み始めてまもなく、その詐欺実行者のうちの一人と会って話をしている。その彼の偽話は、祖国ジンバブエで軍の指導者だった父親が暗殺され、多額の（100万ドル単位）隠し預金があり、それを引き出す手助けをしてくれたら20%の報酬を払うというようなものだった。私自身は初めて聞いた話で、まだまだウブだったしまたその彼の演技も表彰ものであやうく信じかけてしまうところだった。といっても預金引き出しに、80万位の手数料が必要だということで、そんな金額持っていないで幸いだったけれど。

そしてつい最近私の彼のところにリベリアの政府高官の娘という女性から、「Dear Honey」から始まりご丁寧に写真まで添付されたメールが、送られて来たのである。勿論彼は本気ではなく、どういう手順で行くのか見てみようということで、口座情報など一切知らせず何度かメールのやりとりをした後で、FBIに通報する旨のメールを送ったら、もう知りたい情報は取得したとの返事が来たのが、Skype事件の少し前である。それで私も彼も、2つの事件には関連があるかもしれないと思っているのだけれど。何せ相手は名うての犯罪プロ集団だから、被害に会う人が後をたたないのだろう。

9. 東京レポート

こちらの旅行番組で、スペイン人から見た東京のレポートを見た。私が前回一時帰国したのは3年前なので、全く新しい東京の顔も見えて、私にとっても興味あるプログラムだった。私のスペイン人の友人たちもその番組を結構見ている、後でコメントや感想を聞いてみた。

彼らが一様にビックリしたのが、カプセルホテルと朝の満員電車の光景だ。そのどちらもこちらにはないものだからだろう。そして私もビックリしたのが、最近の秋葉原の光景と、原宿通りを歩いている若い女の子たちの、プリンセススタイルだ。まるで漫画から抜け出た様なドレスとメイクアップで、私から見たらちょっと奇抜に見えるけれど、普通に街を歩いているのだろうか？

他の同様の番組で、ラブホテルとカラオケBOXも紹介されていてそれらも話題になった。日本は限られた土地で多くの人口を抱え、独自の発想から生れたウォシュレットやカラオケBOXなどは、日本のオリジナルで、日本にいたら当たり前かもしれないけれど、今回海外から見て日本人の生活の知恵に、改めて感心したのである。

10. スペイン語・英語・日本語

私の語学レベル-英語は日常会話程度・スペイン語はたどたどしいけれど、TVドラマは概ねわかる程度。英語の映画は英語字幕があれば、問題ないけれど字幕がないと耳をダンボにしていないと聞き取れないシーンは幾つかある。パーフェクトには程遠いそんなレベルでも、こちらで生活していて、特別に不自由は感じていない。たとえたどたどしいスペイン語でも、伝えたい意志があればどんな言い方にせよ必ず伝わると思うし、同じ言葉を話す日本人同士だってどんな言葉を駆使しようが、伝わらない相手には伝わらないと私は思う。

常日頃日本語でない言葉で生活していて、いつも驚くのは英語とスペイン語の語彙の多さだ。特に感情を表わす言葉、例えば日本語の「素晴らしい」とか「素敵」にあたる単語が少なくとも6~7語はある。以前外国映画を翻訳しているプロの日本人のコラムで「罵り言葉とか日本語での表現が少ないので翻訳には特に苦労している」というのを読んだ。日本人って良くも悪くも、感情をあまり表わさないから表現する言葉も少ないのかもしれない。だから褒め言葉のような良い言葉でも、罵り言葉のような悪い言葉でも、スペイン語で覚えたら、自分の感情を表現するのに困ることはない。

逆にスペイン語や英語にない日本独特の言葉もある。食前と食後の「いただきます」「ごちそうさま」、相手をねぎらう意味の「お疲れさま」「ごくろうさま」など。これらが日本語にしかない表現だとすると、日本人の礼儀正しさや相手への気遣いなどが見えてきて、ちょっと誇らしく思った。

11. 幸せ尺度

スペインの私が住んでいるところで日本と違う点は、多々あるけれど、サルサを始めてから特に目についたのが、幸せカップルとファミリーの多さだ。それも幸せを絵にかいたような家族が、周りにたくさんいる。

日本だと人前では仲良さそうに振舞って、家に帰れば家庭内別居の仮面夫婦が多いようだけれど、こちらはどこから見ても円満そのもの。日本の友人とチャットで私がどうしてだろうと言うと、友人は「大都会だといくらスペインでも幸せ家族そんなに多くないんじゃない？」と言う。そうたしかにそうなんだ。都会は情報も刺激も溢れていて、何かするときの選択肢も山ほどある。

私の周りのハッピー夫婦たちを見ると、どのカップルも旦那は安定した仕事について、海外に出たこともなく、外国語は一切話さず、何十年もこの地域で愛する人と家庭を築いてきている。もちろん様ざまな知識はあっても、実生活は、比較的狭い地域で動くことなく満足した生活を送ってきているのだと思う。そう考えると余分な情報や刺激は、必要ないのかもしれない。何にせよ、不幸な人を見るよりは幸せな人を見ている方がずっと気分はいいから、周りのカップルさんたちいつまでも幸せに！

12. 中国の脅威

この2~3年でスペインへの中国進出力は、目を見張るものがある。8年前こちらに住み始めた時点で中華レストランは沢山あったけれど、最近増えてきたのが中国人経営の大型雑貨店で、200mに1軒の割合であり、家庭用品・雑貨・洋服・靴など品揃えも多い。現在ではスペイン国内の主要都市はもとより、マラガでさえチャイナタウンがある。またヨーロッパにある多くの中華レストランが日本レストランに店舗替えという記事もあったけれど、ここフエンヒローラに2軒ある日本料理のレストランは、ずっと以前から中国人経営である。

スペインは天気がよければ、コスタからアフリカ大陸の山々が見えるほど近いから、連日アフリカから難民がボートで不法入国のニュースは珍しくないけれど、中国に関しては違法で輸出された中国商品が税関でストップされたというケースはよく聞く。

知り合いのイギリス人会社社長は、こちらに住んでいる中国人女性を仲介に、スペイン入国希望の中国人に労働ビザ取得のためスポンサーになって書類を作成し、何と一人につき、6000€も取って儲けていた。

スペイン人に限らず西洋人全般が、それほど明確に日本と中国の違いを把握しているわけではない。民族だけでなく歴史や文化に関しても日本と中国の知識がゴチャマゼになっている人も多い。スペイン人と結婚して北部に住んでいる日本人女性との会話で「中国人に間違われるのは本当気分が悪いね」ということで意見が一致した。

私は日本人であることに日本にいたとき以上に誇りを持っているし、日本人の繊細さや心遣いは、世界に誇れるものだと思っている。中国人同士のネットワークの強さや雑草のような逞しさは、それなりに尊敬するけれど、繊細さという観点から見れば、全く違う中国人と一緒にされたくはないというのが、私の本音である。

13. 歳の差恋愛って

スペイン生活8年、現在一回り以上年下のイギリス人の彼と一緒に住んで3年になる。スペインはもとより欧米では年下男性を恋人に持っている女優とか著名人の女性が、ここ数年話題にのぼっているけれど、私個人的には日本にいたときから、年下の男性により惹かれる傾向はあった。

私の亡き母は、50代で離婚した後にできた恋人は何と私と同じ年だったので、母と彼の年齢差は27年もあったけれど、娘の私から見てもそんな年齢差を感じさせない、お似合いのカップルだった。その彼は62才で亡くなった母の最後のときまでしっかり面倒を見て、とてもいい関係を保っていたと思う。そういう例を身近に見ていたので、私自身は年下の男性に全く抵抗はない。

過去に年上の男性との付き合いもあったけれど、私は深い付き合いが始まると、年齢には関係なく相手の男性の尊敬できる部分を重視する。その関係が終わるときは、常に何らかの理由で相手を尊敬できなくなり、エンディングを迎えてきた。今一緒にいる彼は「年なんてただの数字にすぎない」と言うし、彼自身も私の年は全く気にしていないようである。

「女性は若いときに年配のお金持ちと結婚して、その旦那さんが亡くなった後で、若い男性と再婚するのが理想」という言葉思い出した。年下の男性を恋人にしたときのメリットは若さを保ちつつ、気分的にもより若くいられるという点で、年配の男性が、若い女性を奥さんにしたときも同じかも。ということで「恋愛に年齢差は関係なし」が、私の結論である。

14. おじさんの出世

この町に住み始めて買い物に出たりしたとき、片足の膝から下が無い老人が路上に座っているのを何度か見かけ、小銭をあげるようになり簡単な言葉もかわすようになった。そんなある日、友人のマンションを訪ねたら、そのおじさんが杖をついて同じ建物に入っていくではないか。義足をつけているのだろうけれど外から見る限り、それほど普通の人とかわらない。できれば顔をあわせたくはなかったけれど、バッタリのタイミングで避けるわけにもいかず、オラと挨拶したら「友達が家賃を払ってくれて、ここに住んでいるんだ」と言ったのは、きまりが悪かったからかもしれないけれど。

私の方はといえば、何となく複雑な気持ちだったのは否定できない。別に相手の不幸を望んでいる訳ではないけれど、私の中で可哀想な人だからお金を恵んであげるという図式があって、そのマンションに住んでいる彼は、杖はついていてもちゃんと歩けていたし、別に可哀想な人には見えなかったからかもしれない。

でも考えてみれば、物乞いだって商売として成立っていいわけで、こちらでもジプシーの貧しい身なりをしたおばあさんの乞食とか、たまに見ることがある。聞いた話では、その老女の後をつけていったらなんと、車庫付の立派な家に住んでいたという例もあるので、物乞いもちゃんと商売として成り立っているのだろう。

さてそのおじさん、今は私の住いのすぐ近くでキオスクの小売店を任されている。その店の前を通る度に、いい生活から落ちていくケースじゃなくベターになって良かったと、内心おじさんの出世に拍手してます。

15. 私のタトゥー

私の左サイド肩甲骨脇には、タトゥーが入れてある。現在の彼と付き合い始めてから10ヵ月後に、入れたものでアツアツの頃に彫る象徴みたいに、ハートの中に彼の名前と、時々私が呼ぶ名称の頭文字の下に愛の漢字入れたオリジナルデザインである。きっかけは、何のことはないこちらの芸能ニュースで見たアントニオ・バンデラスの奥方メラニー・グリフィスの上腕部に彫ってある「アントニオ」に触発されたからという、至極ミーハーな理由からだ。

それでも人に聞かれたときなどは「今の彼が人生で最後の恋人だと思うから入れたのよ」と答えているのだけれど。あるときサルサ仲間の男性に聞かれてそう答えたら「もし最後じゃなかったらどうするの？」と食い下がってきたので「いいのよ、そしたらまだ、右肩が残ってるから」の答え、以外にも大うけだった。

もちろんそんな会話はタトゥーの名前の主には内緒である。別に今どきタトゥーなんて珍しくもないだろうけれど、メラニー・グリフィスが入れた気持ちほどは重くないような気がする。現在の彼を愛している気持ちはメラニーと同じくらいあっても、彼に対してのこだわりや執着はないから、サルサ仲間に答えた言葉は、ある意味私の本音である。

16. サタデーナイトフィーバーとマドリッド熟女2人旅

週末マドリッドのミュージカル観覧1泊旅行に行ってきた。ミュージカルは懐かしの「サタデーナイトフィーバー」今年2月から3ヶ月間、TVで主演オーディション番組がオンエアされていて今回は選抜された一人が昔のトラボルタ演じたTONY役をやった。スペインで生のミュージカル舞台、私は初めて見たけれど歌も踊りもレベルの高さに感心した。抜擢された主演の彼はもちろんだけれど、他の出演者たちも歌って踊ってのハードな2時間素晴らしい動きで観客を充分堪能させた。最後は観客総立ちで手拍子をとって舞台と客席が一つになった感じ、誰もが満足した2時間だ。宣伝のロゴも素晴らしいセンスで、このミュージカルに限らず、スペインのTV番組のロゴやコピーライターも、私はいつも感心して見ているのだけれど。スペイン人の持っている感性って、日本人と良く似ていると思う。

こちらの親友と初めての2人旅、たった1泊の珍道中だったけれど、行程は往復バスで、FGを朝9時に出発途中一回の15分ブレークをはさんで7時間の行程だ。ここからマドリッドへは特急列車も飛行機もあるけれど、値段はバスが42ユーロ、列車だとその倍飛行機はそのまた倍額かかる。今回は4つ★ホテルとシアターセットで45€の、リーズナブルなオファーを友人が見つめてくれたので、バスは安いしFG出発と便利なので結局往復バスの旅となった。

マドリッド到着が4時で、舞台スタートが6時だから、ゆっくり息つくひまもなく劇場へ向かった。ステージ内容は昨日の記事どおり大大満足で、その後マドリッド夜の街へ繰り出した。私が前回マドリッドを訪れたのは、4年前でメトロにしてもホテルにしても、一段と便利になって私たち二人とも住んでいるFGは、マラガローカル都市だから、進歩している文明の利器に、使い方がわからなくて驚いたり、感心したりの場面もあった。きっと久々東京に帰ったときも、同様に感じるかもしれない。

適当なバルを梯子して満腹になった後は、いざサルサクラブへ突入だ。土地に関係なくどこのクラブにもそれぞれ独自の雰囲気があり、また客層も違うから、慣れるのには少し時間がかかる。それでも同行した彼女は、私のサルサのパートナーなので知らないクラブで誰かに誘われるのを待つまでもなく、二人で充分というほど踊ってきた。私が男性パート習得したお陰で、熟女ふたり壁の地方花にならずにすんで幸いだ。結局梯子はせずサルサクラブ1軒だけで、そのままおとなしくホテルへ帰還。翌日は有名な蚤の市の日で、朝食後直行、帰りのバスの時間ぎりぎりまでフリマでの買い物を楽しんだ。

現実に戻れば、アパートには私の彼の7才の息子と祖母（彼の母親）がバカンス滞在中で私にとっては忍耐とストレスウィークなので、その中休みで友人と開放された時間が

持てて本当に良かった。あと残りの5日がんばらなくちゃだ。

17. サバイバル イン コスタ・デル・ソル

今私が住んでいるコスタ・デル・ソルはスペインでも人気のリゾートで、国内からは基より近隣諸国からの観光客や入植目的で訪れる人も多い。観光にしる、長期滞在中にしる、訪れる人の国籍は多岐にわたる非常にコスモポリタンな地域である。

最初の頃の記事にも書いたけれど、人々が夢を求めて様ざまな地域からやって来るのはニューヨークにも似ている。でもここでの生活はそれほど楽ではない。「もしもコスタ・デル・ソルで食べていくことができたなら、世界中どこでもやっていける。」とされている程である。

ではここでの外国人が何をして食べているかというと、一番多いイギリス人は、自営業以外だとタイムシェアなど不動産関係のセールスや、テレマーケティング、次いでバーやレストラン、国籍に関わらず女性の場合だと、オフィスやウエイトレスの職につけなければ、大半が情報新聞にアダルト広告を載せて、個人で売春をしているのが現状である。特にこの1~2年は世界的不況もあいまって、ここでもバブル全盛期は終わっているのも、まともな職につけず本国に帰る人も大勢いる。あとこちらで多いのは、リタイヤした人々で、自分の国で退職したあとの人生を、退職金と本国からの年金で、安定した生活を送っている。

スペイン国内でも、最近では失業率の増加の問題もあり、必要な職種はまずスペイン人で占められるから、入植した外国人が仮にスペイン語を話せたとしても、職探しはそれほど容易ではないのが現状である。

18. アタック事件

指圧マッサージを始めるきっかけとなったアタック事件の話。

その事件はこちらに住み始めて2年目の夏に、起こった。生まれて初めての悲惨で、尚且つ貴重な体験だ。当時私はインド人が経営する、日本レストランで働いていて、勤務を終えて帰る途中、時間は深夜だけれどレストランのあるプラザビルからほどなくところで、周りにはマンションもあり、街灯もついている車道脇の道路を歩いていたときだ。

突然足音もなく背後から誰か忍びよってきて、肩にかけていたショルダーバッグをもぎとろうとしてきた。一瞬何が起きているのかわからず、私は狼狽した。次の瞬間バッグを取られようとしていることに気づき、私は大声あげ抵抗した。バッグの中には全財産・その日貰った給料と携帯など大事なものが入っていて、何としても私はそれらを守りたかった。しかし抵抗しながらも見ると、相手は中東系大男で、襲われたときの何の心構えもない私はそれ以上抵抗しようがなかった。それでもできる限りで抵抗したせいか、胸のあたり何かで傷つけられたけれど、顔面を殴られなかったのは幸いだった。最終的には、その男はしっかり私のバッグを奪い数十メートル先の駐車場に置いてあった車で逃走した。胸のあたりをさわると血がベトリ手についてきた。襲われた場所はレストランからすぐ近かったので、泣きながらレストランに戻った。レストランは閉店していたけれど、たまたまその夜オーナーの友人夫婦が来ていて、外のテーブルで談笑していた。あの夜ほど大泣きしたことは嘗てない。

恥も外聞もなくショック状態をそのまま顕していたと思う。オーナーはすぐに警察と救急車を呼んでくれた。突発事態が起こったときの対処の仕方である程度の人間性が顕れるとよくいうけれど私は頭の片隅で、そこに居合わせた人々の対応を冷静に見ていた。一番的確で心のこもった対応をしてくれたのは、友人カップルのまったくの見ず知らずの女性だった。そのときレストランにはスウェーデン人の女性マネージャーもいたけれど彼女の対応は一番冷たかった。日頃からこの女あまり性格よくないんじゃないのと、思っていたのがみごとに的中した。見知らぬ女性の暖かい介抱を受け私のショックも和らいだ頃、警察と救急車が到着し、生まれて初めてのそれも異国での救急車体験となる。

傷は痛かったし自分の境遇を考えると、憂鬱だったけれど救急車に乗せられたとき「あっこれって生まれて初めての体験だ！」という変な感激をおぼえたし、消防士たちの顔もしっかり見比べている自分がいた。そして異国で初めての入院体験となる。その後マッサージを始めるようになるまでの経過は次回に。

19. 今は感謝のアタック事件

前回記事のアタック事件当時、私は自分が置かれている状況に満足していなかった。日本では幾つかのレストラン仕事の経験から、仕事の大変さも充分知っていたし、そもそもスペインでウエイトレスなど、私が本当にしたいことではなかったけれど、そのときは他に選択肢はなかった。あの夜の事件で、所持金ゼロの悲惨な状況になったにも拘わらず、でも頭の片隅でこれは何かの新しいきっかけで必ずその事件が意味するものがあると、感じていた。

その後何日か仕事もできず、職も失い私は途方にくれた。事情を知った日本にいた娘からは、飛行機代を送るから帰国するよう勧められたけれど、そんな最悪の状況下でも娘の申し出をそのまま受入れるのは抵抗があった。どんなことがあったにせよそれは私が選んだ人生、決して若いとは言えない年代で、祖国を離れ自分で選んだ地だ。6月だったその時、私は夏の終わりまで何とかその地で、再度挑戦してみようと思ひ、夏の間に進展がなかったらその時は日本に帰ろうと決意して、その旨娘に伝えた。

あの時襲われていなければ、今の私はいないと断言できる。なぜならあの事件をきっかけに、現在のマッサージの仕事を始めたからだ。でも指圧マッサージは、大叔母直伝だから資格を持っていた訳でもなし、日本で仕事の経験もなかったので躊躇したけれど、背に腹は変えられず、他にできることもなく、又周りの何人かの薦めもあり思い切ってやってみることにしたのだ。もちろん何十年も前に習ったことは殆ど忘れていたけれど、自分が肩凝りだからどうされたら気持ちいいか良くわかっていたので、友人の身体を借りて練習し、それほど難しくなくコツをつかむことができた。クラシファイド新聞に広告を載せたら、すぐに反響があり予想以上に順調に客足が伸びていき、その後固定客もついて、ここでのサバイバルに成功し現在に至っているわけである。

人生次の曲がり角には何が待っているかわからないと、言うけれど、もともと石橋を叩いて渡るほうではなし、どちらかと言わなくてもかなり大胆な、というより無謀なほどの行動派だからこそその人生かもしれない。でも上記のような経過で事件後は別の新しい人生の扉が開かれたので、あのとき襲ってくれた大男に今は心から感謝している次第である。

20. 女性のバストサイズ

以前アンケート調査で「セクシーさを感じる場所」世界41ヶ国35万人の男女から取ったアンケートの回答を見たことがある。結果は、台湾とタイを除き日本を始めとするアジア諸国のみ胸をトップにあげている。胸をセクシーさの対象にしていない他の国はイタリア・ドイツ・スイス・ギリシャ・東欧諸国が「お尻」/アメリカ・イギリス・北欧・オーストラリアは「眼差し」/スペイン・フランス・カナダは「態度と姿勢」/台湾・タイ・イスラエル・チェコ・南アフリカが「端正な身体」となっている。

一般的に日本を始めとするアジア男性は、女性の胸に強いこだわりをもっているようだ。それにしてもランキング結果に1位から6位までAカップがないのをみても、日本男性が大きなバストを好んでいるのがわかる。

こちらのビーチはトップレス解禁だけれど、シリコンバストの女性良く見る。走っても揺れないし横になっても山は崩れないし、どこから見てもとてもナチュラルとはいえない。それでも大枚払って手術したんだらうから、見せたい気持ち、わからなくはないけれど。こちらの女性は全般的に大きな胸をしていて、男性諸氏も普段から見慣れているので、だから特別こだわりもないようだ。

私自身は、垂れるほどの容量がない身としては若い頃からCカップバスト憧れだったにせよ、たとえお金があったとしても手術してまでとは思わなかったし、現在でもパートナーの男性には、あるがまま、素のままの自分をそのまま受け入れてほしいと思っていますけれど。

21. 褒め言葉いろいろ

現在スペインでイギリス人の彼と住んでいる環境で、家での会話は英語・TVとこちらの友人との会話は、スペイン語・そして日本語でブログを更新している。といってもトライリンガルなど程遠く、日常生活には困らない程度のレベルだ。最近こちらの友人たちと集う機会に、「日本語でこれは何て言うの？」と興味を持って聞かれることがよくある。

そんな折り、私の彼に「You have a amazing body」の和訳を聞かれて、（よりにもよってどういう目的でその言葉が知りたいのか不明だけれど、深く追求はせず）私の中では、時代劇のお代官様が町娘を手箒めにするシーンで「いい身体をしてるのう」というのが頭に浮かんできて（笑）言葉に窮してしまった。

彼に「日本では相手の身体をダイレクトに褒めるって習慣がないのよ」というとすごく不思議そうな顔をして「どうして？」と聞いてきたので再度答えに困ってしまった。そう西欧では女性のプロポーションがよければ、素敵な身体をしていると褒めるのは当たり前で、日本で言う「スタイルがいい」よりもっと具体的なニュアンスが含まれている。これも文化の違いかもしれないけど

身体のみに限らず、全体の雰囲気から服や着こなし髪型まで、こちらは男性も女性も相手を褒めるのが上手で、言われた方も気分よくそれらの褒め言葉を受入れている。私もできる限り、お世辞でなく良いと思ったことは心から褒めるよう心がけている。だってその一言の褒め言葉で、その人が一日いい気分で過ごせたら、それはとても価値ある一言だと思うから。

22. アメリカ人女性実業家

彼が今回仲介して女性アーティストに投資するのはマイアミ在住、54才の女性実業家である。結婚していて何とご主人は89才で、成人した2人の実子の他に3人の養子がいるとのこと。そのご主人自体がかなりのお金持ちであったようで、現在実際のビジネス業務は、全て奥方がこなしているから旦那の方は、今回も一切表には出ていない。それでも来月、その彼女が新しく始めたワインビジネスをまとめるのと、私の彼と投資相手の画家本人に会う目的でご主人と共にこちらに来る予定である。

こちらでの2週間の滞在のスケジュールは私の彼がすべて作成して、フライトの手配からホテルの予約まで、ほとんどは私の手を通して済まされた。というのも現在私はマッサージ業は退いているので、彼の秘書的な業務をこなしている毎日だからである。そしてこちらに滞在中は、プロジェクトの当事者だけの3者会談を除いては、もちろん私もアテンドする予定を組んでいる。彼は自宅リビングが仕事場で、私はその彼の背後のサンルームでPCと向いあっているから彼の電話のやりとりは、いつも聞いている。たまたま今回はクライアントも投資家も女性でそれも全く違うタイプだけれど、共に魅力的で、私から見ると、間に介入している彼に対してたとえ仕事がらみでも、彼女たちはそのチャームを十分に使用しているように感じられる。だから、来月その二人の女性と彼と一緒に会うときは正直興味しんしんなのである。

焼きもちなど焼いている場合ではない。だって名目は仕事とはいえ、それぞれの男女の思惑が絡んだ状況下での、人間ドラマを見逃したくはないですからね。

23. VIVA ポジティブマインド

波乱万丈の人生を歩んで来たわりには、私自身は超がつくほどのポジティブ思考者である。いつ頃からかを考えると、今では私のバイブルとなっている本「神との対話」に出会ってからだから10年くらいだ。

「神との対話」は、最初のシリーズの3冊は繰り返し読んで、共感したりすごく納得したり部分はラインを引いたりページを折ったりで、今でも時間があるときは繰り返し読んでいる程絶対手放せない本である。若い頃は人並みに悩んだり心配したりもしたけれど、基本的にはどちらかといえば、楽観主義者だった。でも幼い頃の夢だった海の近くの外国生活を実現し、ひとつひとつ、自分のしたいことが実現するにつれ、より私の中の神への信頼が増して、よりポジティブになる、という良い循環の輪ができているのだと思う。

マイナス思考でも同じことが起こる。というのも思考は現実化する（ことを私は信じている）からである。例えば心配ばかりしていて否定的なことを考えて、それが実現すると「やっぱり悪いことが起こった」と思い、そこでまたあらぬ心配をするから悪循環になる。心配してもしなくても何かが起こるときは起こるのだ。もちろん最悪の場合を想定し心の準備をしておくのは悪いことではない。でもどうせならポジティブに考えて希望を持っていた方が、ずっといいと私は思う。例え失敗しても、人生には常に別のドアがあるのだから。

24. トホホのヘヤーカット

フェリアでフラメンコドレスを着て花飾りをつけたいがために、ウィッグを買った。ちゃんとしたウィッグを売っている店はこちらには1軒しかなく、そこはアフリカ人男性経営のヘアーサロンだ。その店は初めてだったけれど、ついでに私のカットとハイライトをしてもらうことにした。それがそもそもの間違いだった。前回してもらってカットもカラリングも気に入っていた店に、予約して行くべきだったけれど今となっては後の祭りである。

私はショートヘアーなので後ろ部分をマシーン（バリカン）使用までは別に良かったんだけど。ハイライトにヘヤダイ液を部分塗りするのに、アルミ泊使わずに、いきなりブラシでダイレクだ。（それはないでしょ、私自分でするときだって銀紙でハイライト入れたい部分包むわよ。）お次はカット、前髪をこういう風にとちゃんと雑誌のモデル見せても「OKOK」といいながらジョキジョキ（うわぁ、アフリカンのお兄ちゃんかんべんしてよ。）そして仕上げ、スタイリングすることもなく、ただドライヤーで乾かして終わりに一言「前より若く見えるよ」だって。

料金は前回行った店の半額だったけれど、それにしてもね美容室だけは実際に行ってみてからでないと、その店や美容師の質はわからないのは十分に知っていたけれど、今回は大失敗だ。特にヘアーカットは気に入らなかったら、とにかく髪が伸びるの待つしかないから、ジェルとか使って何とか宥めるしかない。やっぱり帰宅したとき彼からのコメントは何もなかったからね。トホホ。

25. アテンド疲れた～

彼のクライアントのアメリカ人女性実業家 夫妻が 日曜に到着した。昨日までの4日間 びっしりのアテンドで、今日から6日間は彼の友人の奥さんがロンダ・セベリア・グラナダをガイドしながらアテンドするのでお陰でこちらは小休止できる。今回何が大変かというと、やはりご主人が高齢（89才）で足が弱っているから歩くのが大変なのに加え、時々ボケて、記憶がブランクになってしまうことだけれど、どちらの状態も来西まで、彼は知らなかったことだ。

私は旅行のすべての日程の手配をしていて、心配はしていた。私の年でさえ、今回のスケジュールをもしこなすとしたら、少しきついと思ったから。幸い車イスも手配して、3都市への移動は全て車だし、ガイド付きだからその点は安心だけれど、でも実務をこなす旦那をコントロールしている（かに見える）奥方自身が至ってEasy Going気質のようだから、その点は楽だ。何より日常のルーティーンがくずれるのと、昼も夜も外食それも飽食だから、胃への負担が大きくなる。食事の支度をしなくていいのは有り難いけれど、こんなときは日本食のサッパリした味が、本当に恋しくなる。さて数日休んだ後、マラガで再び数日のアテンドだ。私が期待していた3者会談は例のアーティストのスケジュール調整がつかないということで、今回は実現しなくなったのは、何とも残念なことである。全17日間の日程で、7つの都市を回るビジネスと、観光を兼ねた今回のクライアントの旅行、とにかく事故なく、無事に最後まで、元気に楽しんで帰国できますようにと心から祈っている。

26. 89才ご主人元気で感動の再会

現在ガイド付きでロンダ・セビリア・グラナダを旅行中のアメリカ人クライアント夫妻、元気で各地を楽しんでいると連絡があり何よりだ。ご主人の方はセビリア滞在中にレストランでフラメンコショーを見ての89才の素敵なバースデーを迎え、お二人ともご満悦だったようだ。

一緒に何度か私も食事をしたけれど、それにしてもご主人良く食べるしお酒も飲む。足は弱っているけれど、誕生日の夜など奥方が今回付き添ってガイドをしている私の彼の友人の奥さんに、コンドームを買いたいと聞いたそうだから、あちらの方も現役のようでビックリ！でも食欲と性欲って共にある意味では健康のバロメーターだから、健康の証し、良いことだ。

さてそのご主人H氏は1920年ユダヤ人の両親のもと、ドイツで生まれた。20代でホロコースト、ユダヤ人粛清が始まったときに、苦難の末ペルーに逃れた。その後新天地ペルーでモーターバイクの製造販売で成功し、30年間事業を発展させていった。50代で米国に移住し、何度かの結婚・離婚を経て、7代目のとき当時30代後半だった奥方と会い、再婚し現在に至っている。その時点で既にミリオンネアだった。

今回の旅行でマドリッド一泊はペルー在住時、寝食を共にし、事業を一緒に成功させたH氏にとって兄弟のような存在であるスペイン人友人に会うのが目的だ。米国に移って以来会っていなくてもTEL番号と住所は知っていた。ところがそのTEL番号、数字が一つ欠けていて私の彼がネットで調べてもどうしてもわからなかったのを、私がちょっとしたヒントから正確な番号を見つけることができたのである。

そして前もって連絡しその友人男性は、H氏夫妻が到着するマドリッド駅まで、迎えに来てくれることになった。さて夫妻が到着した駅には、その友人が娘さんを連れて待っていて、感動の再会の場面となるのである。（私はその場にいたわけではなく奥方から聞いた話）。20年ぶりの再会で二人とも抱き合って泣いたそう。当時幼かったその娘さんも彼のことは良く覚えていてやはり感動して泣いていたようだ。奥方も思わず貰い泣きしたとのこと。激動の時代を生きながら、成功した人生を送ってきたH氏ではあるけれど、よる年波には勝てず、こちらでも元気ではあってもボケの症状が出て、時々自分がペルーに住んでいると錯覚するくらいだから、ペルーでの生活は、きっと心に深く刻まれているのだろう。

今回H氏が古知の友人と再会できたことで、老齡なのに長時間飛行に耐え、フルスケジュールの旅行でここまで来た甲斐があったというものだろう。何よりその

感動の再会に私が一役買えたことは、本当に嬉しい。

27. 地方新聞から不運な事故

こちらの地方紙記事で、目についた記事があった。

ネルハ在住のイギリス人女性の友人同士数人が、深夜近くレストランのテラスでお酒を飲みながら、談笑していたときのこと、その中の一人が椅子に置いていたハンドバッグがフロアに落ちて、それを拾おうと立ち上がったとき、そのバッグに引っかかりテーブルにつんのめってしまい、そのとに割れたガラスの破片が彼女の脇の下に突き刺さった瞬間に大量の血が溢れ出した。女性たちの悲鳴を聞きウエイターとオーナーがすぐに飛んできて、救急車と警察を呼ぶ以外に、なすすべはなかったとのこと。

救急コールが00：40分、警察の到着が00：45分、救急車到着が00：55分、近隣の病院到着が01：15分で迅速な対応ではあったにもかかわらず、出血があまりにもひどく01：40分その女性は、42才の生涯の幕を閉じた、というのが事件の全貌である。

同席していた友人の弁によれば、すべてが同時にアッという間に起こり、誰もが彼女の突然の死にショックで呆然としているという。不幸な偶然が瞬時に重なって起こった事故だと記事には書かれていたけれど、私は記事を読んで、まるで映画の「ファイナル・ディスティネーション」を地でいったような事故だと思った。

気をつけた方がいいといっても、こんな事故では防ぎようがないような気がする。全くもって、人生は次の曲がり角には何が待ってるかわからない。見ず知らずの女性ではあるけれど、亡くなった女性の冥福を祈らずにはいられない事件だ。

28. 不快なトラックバック

アメブロ始めて3ヶ月経過したけれど、今日の今日迄10月分投稿に数件の不快なトラックバックがついているのを知らずにいた。先日嬉しいコメントをいただき、そのコメント欄からたまたまそれらのトラックバックを見つけたという次第である。

ブログの迷惑コメントに関しては以前から不思議に思っていたのだけれど、どうして皆同じ様な文面で尚且つ意味の良くわからないことが、書いてあるのだろうか？何かお手本書き方みたいなものがあるって、それにそって書いてるみたい、個性も何も無いよね。読む人に不快感を与えるのが目的だとしたら、なんととても淋しい気がする。それらの文を目にして（読む訳ではない、ただ目を通すだけだ）、決して快いとは思わないけれど、後はクリック削除すればいいだけのことだ。

私はレイキーヒーラーなので、宇宙で目には見えないエネルギーの存在は信じている。確かにパソコンの画面を通して伝わってくる気（ダイレクトではなくて、あくまでも文面を通してだけれど）はあると思う。以前SNSの喧嘩大好き人間が集まっているサイトなどは、覗いてみたときに、邪気のようなものは感じたし、怒りに囚われている人々が集っているから、それなりの嫌な雰囲気は感じられた。

「類は友を呼ぶ」の言葉は100%当たっている。良い類にせよ良くない類にせよ、周りをみれば、世の中心さわしい者同士がつるんでいるのだと私は思う。

いずれにせよトラックバックに関しては承認後の公開に設定変更したので、今後は変なトラバ日の目を見ることなく終わるのは間違いない。アディオス！！！！！！

29. 小忍耐ウィーク

今回はイギリス人BFの7才になる息子ひとり1週間滞在の忍耐ウィークだ。

今日が最終日、こんなときの「Time flies」飛ぶように時間が過ぎて行くのは大歓迎である。年を重ねるにつれ残り少ない自分の人生の時間と、その過ごし方はより重要になってきているから私は娘に「もうママはこれから先はわがままに生きていくからね」と宣言している。でも人様に決して迷惑をかけない私なりの筋の通ったわがままを、目指しているのだけれど。

彼の息子の滞在は、私の日常生活の平和空間を荒されるので、私としてはとても心地良いとはいえない。彼にとっては最愛の息子でも、私にとっては他人だ。もちろん滞在中、私は無理のない範囲でできる限りのことはする。彼自身はいつも息子が来ているときは、あれもしたいこれもしたい、でも実際には彼のキャパを越えているので、必ず葛藤からのストレスがある。そんなときに理不尽に息子を怒って声をあげたりしたら、私は息子の側にたって彼を諫めたり、遊ぶときは遊ぶ、注意するときは注意したりで、常に同じ態度で息子に接しているから、幼い息子でもそれはわかってきているようだ。息子自体も今までの数回の体験で学び成長しているようだから、良いことだ。

それにしても、両親の別居では常に幼い子供は被害者だ。私自身も30代で離婚したときには娘に同じ思いをさせてしまったから、彼の息子に同情はするけれど、そこに介入するつもりはない。その私の決断は昨年はっきり私の彼には明言してある。一番大事な幼年期の子供の面倒をみたり、責任を持つような人生を送る為に遠く日本を離れてきたわけではない。

私自身は自分の人生で何がしくて何がしたくないかは、明確にわかっているので、たとえ愛する人の希望に反したとしてもそれは貫いていくつもりである。

30. 私と煙草

私は喫煙者で大の煙草愛好家である。10代後半からの喫煙歴だから、人生の大半を煙草をくゆらしながら生活していることになる。幸いこちらスペインは100㎡以上のレストランでの禁煙ルームが設けられた位で、まだまだ喫煙天国と言っていい。もしかしたら、日本の方が厳しいかもしれないほどだ。そんな喫煙天国でも、私の周りは、どちらかといえば吸わない人の方が多い。内訳は以前吸っていてやめた人が30%であとの70%は、元々吸わない人達。そんな中にいても街自体が喫煙者に門戸を開いているから、特別肩身の狭い思いをすることもない。

私自身はスリムでライトのタバコを3日で2箱（40本）のペースでそれも、フィルター
の根元までは吸わないから、ヘビースモーカーではない。それでもタバコを吸うこと
自体を楽しんでいるので、やめるつもりはない。周りの友人には”煙草なしで10年
長生きするよりは、煙草と共に10年短い人生を終えるのを選ぶ”と豪語している。

私はやめようと思えばやめられる。というのも、長い喫煙歴の中で1年間だけやめていた時期があるからだ。それは娘を身ごもっていた妊娠中の1年間で、妊娠が
わかった時点で、やめることを決めてその間は1本も口にしなかった。その後、
出産し娘が3ヶ月になったときに再び吸い始めた。同棲中の彼も喫煙者だけれど、
彼の場合はやめようと思っているけれど、中々やめられないケース。それに大口
の取引をまとめている最中などとても煙草を手放せる様子ではない。

カップルの場合片方が吸っているとやめるは難しいというのはわかる。でも最終的
には、本人の決断と意思の問題だと思う。私の父方の祖母は98才で他界したけれど、
亡くなる前日までタバコを吸っていた。その年まで生きたいとは思わないけれど、
ただただおいしくタバコが吸えて（私にとってはそれが健康の証しだから）、たとえ
10年短くなっても、それで寿命をまっとうできれば、幸せ。

31. 心配事があるときに

以前に書いたと思うけれど、私は超がつくほどのポジティブウーマンである。波乱万丈の山あり谷あり人生歩いてきて、楽天主義でなければ、自殺していてもおかしくはないような破天荒な人生と自分でも思う。

でも10年以上前、今では私のバイブルとなっている「神との対話」に出会って以来、ずっと人生が生き易くなった。年を重ねる毎に、様々な出会いや体験から多くのことを学んできているのも、プラスになっている。

先日は荒れ模様だった彼との仲も翌日は天気回復し、今また大口の取引の最中で、あらぬ心配をしている彼にアドバイスをしたところだ。その内容とは・・・
(人生で何か起こったとき、仕事に限らず対人関係でも、その他何にでもあてはまる。)

まず、最悪の状況を想定して、それに対しての準備をする。最悪の場合への心構えが出来たら、あとは心配しないこと。それ以上悪い状況の考えに、囚われてはいけない。悪い状況ばかりを心配していると、反って引き寄せてしまうケースも多々あるからだ。よくポジティブに考えていたのに、その通りにならないとショックが大きいから、ネガティブに考えていた方が良いという人がいるけれど、決してそうではない。マイナスの思考はマイナスの状況を引き寄せて、それが現実となる。

どんな状況であろうと人間は、誰しも必ず乗り越えられるだけの能力を持っているのである。最悪の状況に対しての心の準備をしつつ、希望さえ失わずにいれば、必ずや道は開けるのである。たとえその時失敗しても「ダメでもともと」また最初からやり直せばいいだけのことだ。人生はやり直しができるのである。

32. スペイン人の対応様々

こちらで生活して来年は10年目に突入だ。現在に至るまで場所柄様々な国籍の様々な年代の人たちとの交流があった。最初の2~3年はアパートを世話してくれたフィンランド人女性や、彼女の周りの人たちと、また私のマッサージの仕事を通しては主にイギリス人、アイルランド人、スコットランド人などとの交流が多かった。

サルサを習い始めてからできた友人は、すべてスペイン人である。というのも、こちらでサルサを習っている人の大多数がスペイン人なのと、こちらのスペイン人と外国人との交流は、殆どとっていいくないのが現状である。外国人に対して決して感じが悪いということはないけれど、でも大手を広げてウエルカムかということ、そうではない。だからこちらに入植している外国人（国籍に関わりなく）がスペイン社会に入り込むのは、それほど簡単ではない。

私の場合はラッキーにも、今は親友となっているスペイン人女性が彼らのグループに招き入れてくれたことと、あとは私自身がスペイン社会に溶け込みたかったのでダンスを通じ、できるだけ友人をなろうと努力したこともあると思う。

そんなバックグラウンドから周りのスペイン人たちの、私に対する対応を考えてみた。殆どがダンス仲間だけれど、概ね男性は皆感じがいい。日本人だということですからごく興味を持って接してくる男性もいれば、国籍など関係なくスペイン人と同じ様に接して来る男性もいる。ところが女性たちの対応はといえば、それが微妙に違うのだ。たぶん女性の場合ってそこに嫉妬だとか妬みだとか、入ってくるからだと思うけれど、それも大体そういう感情をストレートには出さない。私自身はどちらかということ第6感是人よりも鋭いと思うし、当たることの方が多いので信じている。また言葉に出さない隠された人の感情も、感じ取ることができるので、そのセンスは人を自分なりに分析するのに大いに役立っている。

私は自分の感情には極めて素直に生きているから、素敵な人は素敵だと感じるし、嫌なヤツは嫌なヤツだと感じるからできるだけ近寄らないし、自分より優れたものを持っている人を見れば、凄いと感じて尊敬もする。何十年も仲良く過ごしているカップルや、素敵にサルサを踊る女性など、うらやましいとは思っても、妬みはまったく感じない。

私に対して微妙な対応をしてくる女性たちを見ると、根本的に自分に自信がない人が多いようである。それと隠されたコンプレックスもある。たぶん彼女らからすると、遠く離れた東洋の異国から来て、こちらの文化に馴染んで友人もできて楽しんでいるのが、面白くないのだろう。

私はどこにいても私だし、様々な人の思惑を気にして生きていくなど無駄にする時間はないと思っているので、人の対応に一喜一憂したりはしないけれど。私の人生のタイムはとうに過ぎた今、諍いもなく平和に楽しく、常に心に愛を持って生きていくのが理想である

33. 彼がアタックされた！

昨夜私はダンス仲間と外出して、深夜過ぎに帰宅したので彼がアタックされた経緯を、朝起きて彼から聞いて本当びっくりだ。

数年前私も襲われたことがあり、そのときの私と同じ彼も全く予期していない不意打ちだったようである。事件は午後10時過ぎ自宅からビデオショップへ行く途中、彼が表通りから一本入った細い裏通りを歩いているときに、いきなり後ろから羽交い絞めにされて、後頭部を殴られ同時にもう一人のアフリカ人がポケットを探り中の物を取った。

被害は携帯電話とバンクカードと現金100€で、身体の方は後頭部のこぶと額に小さな傷だけだったのは、不幸中の幸いだ。彼はアーミー出身者だし、ボクシングの経験もあるので羽交い絞めした相手の顔面に、2~3回強烈なパンチを見舞ったらしいけれど、何せ相手は屈強なアフリカン2人で、取るものを取ったあとはすぐ走って逃げて行ったというのが、事件のいきさつである。

私も過去に同様の経験をしているからわかるのだけれど、今でこそ何処を歩くときにもバックはしっかり手に持って、警戒を怠らないようにしていても、事件に会う前は自分が襲われるなど思いもしなかったし、警戒するというアイディア自体、頭に浮かばなかった。

今住んでいる地域は、海辺から少し内地に入った地元のスペイン人が多い地帯だけれど、アフリカ人の不法移民も多く住んでいる。大都市ほど警察の目も厳しくないため、通常はアフリカから不法入国しても、ここではCDや偽物のブランドのサングラスやBAG等ツーリストに売り歩いている。昨今は経済不況のあおりをくらって、観光業自体も落ち込んでいるから、その余波が彼らに来ていることは想像に難くないけれど、それにしても同情の余地はない。

彼はといえば、幸いにも私のときのようになけなしのお金ではなかったし、カードも直にストップして、携帯も2台ある内の1台だったから、もちろん気分は優れないようだけれど、起こってしまった事故、今後の気をつけるべき教訓として受止めているようである。

34. 終電を逃したら

一時帰国で日本滞在中は、ディナーや踊りに行ったりで遅くなって、品川のホテルに電車で帰れなかった日が3回ある。渋谷からが2度、あとは六本木からで、タクシー利用で帰ったけれど、そんな近距離でもメーターはどんどんあがって日本のタクシーの高さを実感した。

以前こちらの電車駅で3つ離れた友人宅を訪れたときに、やはり終電に間に合わず、そのときは歩いて帰った。その時間、まだバスがあったので時刻表をみると、20分程待てばバスが来るとなっていたので彼とバス停で待っていたけれど、40分待ってもバスは来ない。彼も私もその夜タクシー代を使いたくないということで、意見が一致していた。時刻表のバス到着予定から30分経過して、とうとう二人ともしびれをきらし、歩いて帰ろうということになった。歩く道は海岸沿いだし、夏だったけれど深夜の時間帯で海風も心地よくいざいざ手をとって歩き始めて5分もしないうちに、私たちの横をバスが通り過ぎていったのである。長いこと待って歩き始めてバスが行ってしまっても、絶対にタクシーは呼びたくなくて気を取り直して歩き続けた。最初の30分は海岸越しに見える遠くのネオンや景色を楽しんでいたけれど、そのうち湿気を帯びた海風にさらされて、汗はダラダラ足は痛くなるので、もう少しもう少しと自分に言い聞かせ、やっと住んでいるアパートの隣町にたどり着いたのが1時間半後である。その夜は隣町にあるディスコに行く予定だったけれど、足も痛いし歩き疲れてもう踊るところではない。そこで近くのバーで喉を潤し、足の痛みも治まったところでそこからまた20分かけて自宅まで帰ったという、大歩きの夜だ。

ダンス仲間との毎週末のディナーとクラブは遠出をせずに近場にしているけれど、友人の車で行く。2台の車ともドライバーはお酒を飲むけれど、飲んでも2～3杯だし警察の取り締まりもそれほどないからラッキーと言えばラッキーだ。でも飲まない私やドライバーである友人の奥方に限って運転はしないので不便だと言われる。そんなこんなで色々考えると、たとえどこの地域でも毎晩大晦日のように、電車やバスが24時間運行していたら言うことないのに。

35. 英語字幕スーパー

以前私の友人が中国人からアメリカ映画のコピーDVDを買ったことがあり、そのDVDを見たときの話。商品はオリジナルではない、偽物コピーなので日本語字幕もなし、それで英語の字幕スーパーを選んで見始めたら・・・・。

ん？何かおかしい。映画内で俳優が実際話している言葉と、字幕スーパーが一致しない場面がある。映画自体はハリウッドメイクの単純なアクションだったけれど、そうなったらストーリーよりもセリフと字幕の違いのほうに気を取られてしまい、友人と「あ、またここも違う」といいながら、結局その微妙な違いを追うのに終始しているうちに、映画は終わった。何でだろう？と疑問に思って色々考え、分析してみると、そのDVD自体たぶん中国人用に中国語の字幕が付いていたのだと思う。それを基に転売を考えた人間が、その中国語字幕を英語字幕に、書き換えたのだろう。だから、直接英語のセリフをそのまま英語字幕に直したのではなく間に中国語が入っているから、逆訳の微妙な違いが起こってしまったのだ。それにアジアの言語だと、英語の言葉で直訳できない言い回しもいくつかあるからだと思う。

例えば、日本語を例にしてみると、英語セリフ「F○○○ You!」→日本語訳「馬鹿野郎！」から→英語に訳した字幕「Idiot!」となる。中国語でも同じことが起きるのは、容易に想像できる。最終的に字幕とセリフをチェックせずに売ってしまうなど、いかにも大陸的で大雑把な中国らしいけれど。

ともあれ疑問がとけて一件落着、映画よりも謎解きに満足した一夜だ。

36. クリスマス街の灯

いよいよ12月年の瀬、こちらはクリスマスの街の灯りがきれいだ。

どの街も通りごとに違ったデザインのネオンで飾りつけられている。それも毎年デザインが変わるのである。友人に「どこの市も毎年お金をかけてるわね。」と言ったら、何と各市で前年飾りつけたネオンを交換するのだそうだ。だから毎年新しいものを使うのではなく、いくつもの市で廻しまわし使うのだという。これも生活の知恵といえるかもしれない。

景気が良いときはもう11月からネオンが輝いていたけれど、不況下の今は点灯時期も点灯時間も短縮されて、大幅な経費節減策だ。さてクリスマスは教会でのミサと、後は一般的には家で家族と過ごす人が多い。もちろん食卓を飾るのは、七面鳥の丸焼きとクリスマスケーキだ。

こちらで毎年必ず「日本ではクリスマスは祝わないんでしょう？」と聞かれて「いえいえこちらと同じように七面鳥やケーキでお祝いするし、街の飾りつけもネオンも綺麗よ」というと皆一様に驚いた顔をする。ヨーロッパ人からすると、東洋の仏教国というイメージと、クリスマス行事は結びつかないようなのである。

ニューイヤーズイヴの大晦日は、カウントダウンの12の鐘の音と一緒に新しい年の健康と幸せを祈りながら、12粒のぶどうを食べる。ぶどうはそのまま飲み込むので、家庭で用意するときはあらかじめ皮をむいて、種も除いておかなければ大変だ。ぶどうと一緒にシャンペンも欠かせない。そのカウントダウンのときは教会広場に出向いて祝う人も多い。毎年広場は大勢の人で埋まり、シャンペンで乾杯して、隣あわせた人たちと抱き合って新年を祝うのが、恒例である。

去年彼がイギリスに帰っていたので、私一人だったのと同じに今年も自分の選択でスペインでの一人新年を決めた。それは去年同様、教会広場でカウントダウンを済ませて、そのままダンス仲間が開催するパーティーへ向かうプランがあるからである。

37. 男の勇姿

映画「キング・アーサー」で戦場に赴く王と円卓の騎士たちが、馬に乗って城から出てくる場面。「ラスト・サムライ」でも竹藪から武士たちが馬に乗り出てくるシーンは、思わず身を乗り出して見てしまうほど格好良い。

東西問わず、戦国時代の鎧兜と戦闘服ってすごくおしゃれだったと思う。どんな男が着てもきっと勇ましく素敵に見えてしまうだろう。死にゆく覚悟で行く人に対して格好いいなんて不謹慎だけど、でも領地や名誉だけでなく女子供を守るためにも戦に挑むわけだから、そんな男たちの勇姿が魅力的に見えるのも当然かもしれない。

普通の日常生活では、まずそんな勇姿を見る機会って、今の時代はそれほど多くないような気がする。アラブのある国で過去の指導者を称える祭りで、白装束をまとった男たちが刀で自分の頭を叩きながら、通りを夜通し練り歩くお祭りのルポを見たけれど、木刀でなく本物の刀だから、頭からは血を流し、服も血で赤く染まっている姿など私には野蛮としか思えなかった。でも驚くことに、その国ではそれが男の勇ましさの象徴のようなのである。

戦争のない平和な暮らしは理想だけれど、本当の男たちの勇姿を見たい気もしてしまう。

38. 心の掃除

物や身体が、ほうっておけばどんどん汚れていってしまうのと同様に心もやはり汚れが溜まっていく。洗わずにいたら身体に垢がたまっていく様に、愛に反した思いを持てば、知らず知らずの内に心にも垢がついていく。だから時々心も掃除をする必要があると思う。

誰かを憎らしく思ったり何かに怒ったりしているとき、人はものすごいマイナスのエネルギーを使っている。そんな時、心はとても疲れている。だからそんな疲れた心を癒し、綺麗にするには良いもの・美しいものを見たり触れたりして、心を感動させること。映画・音楽・美術・本などなんでも良い。いいものに触れて心が洗われたようだ、というのはそういうことだ。だから美しいものを美しいと、感じられる感性を持つこと。世の中にはキレイなものをキレイだと、素直に見られない人もいる。そして、どんなに美しく着飾っても心の汚れは、表に出てくるものだ。私の友人には美人で心優しい人もいる。そんな時私は“天は二物をちゃんと与えている”と思い、嬉しくなる。

私たちは日常の生活で様々なことがらに触れ、色々な事を考えるけれど、聖人君主ではないから、常に愛だけを持ってなんて不可能だ。無意識のうちに、悪い感情を抱いていることも多々あるはずだけれど、たまにそんな自分を振り返って、心の掃除をするのも必要なことではないだろうか？

「エピローグ」

こちらでの生活をブログに書くことが日常の一部となっていて、それをきちんとした形で残しておきたいという思いからEbook制作が始まった。そしてそれをシリーズ化していくのが冒頭でも書いたように、私のライフワークとなりつつある。

今回は第二弾でこの後やはり日常生活から感じたことや事件を綴った「第三弾」そして大好きなダンスのことから始めて男と女のよもやま話「男と女のダンス模様」大好きなドラマと映画のレビュー「YaYaの面白映画ドラマレビュー」、その他に主に私が過去に関わった心病んでいる人々との出会いを綴った「心の病いつれづれ」を続けて発行予定である。というわけで今回の第二弾は無料でお届けいたします。少しでも多くの方に楽しんで読んでいただいた上で、続くシリーズをお買上げいただけたら、こんな幸せなことはありません。

著者及びデータ

幸多 魅瑠

1950年代東京杉並に生まれる。2001年東京からダイレクトにスペインアンダルシアの小都市を訪れ第2の故郷と決める。指圧マッサージとレイキヒーリングを仕事としながら、他に「スペインでダンスレッスン」Dance三昧in Spainの企画とアテンドもしている。2014年10月より海辺のホテルで一人暮らし中。

Data

スペインYaYaの面白エッセイ

発行日 2015年10月20日 第2刷発行

著者 幸多 魅瑠（こうだ・みる）

発行者 高野 明子

発行所 Dance三昧in Spain

ブログ「FelizYaYaのスペイン便り」(<http://ameblo.jp/feliza55>)

Facebook「ダンス三昧 in Spain」(<https://www.facebook.com/akiko.takano.3576>)

「スペインでダンスレッスン」(<http://www.dancezanmaispain.com>)